稱讃

２８７号

発行者　浄土真宗本願寺派　稱讃寺
〒121－0075東京都足立区一ツ家3－5－20
2026年11月1日発行

一、和歌の浦曲の　片男波の　よせかけよせかけ　帰るごとく
　われ世に繁く　通いきたり　みほとけの慈悲　つたえなまし

二、一人いてしも　喜びなば　二人と思え　二人にして
　喜ぶおりは　三人なるぞ　その一人こそ　親鸞なれ

三、なごりのみ言　さやかにして　み名よぶ声を　慕いきまし
　法のつどいの　み座ごとには　み影をうつし　臨みたまう

（『報恩講の歌』より）

特集　金子大榮師のご領解

『親鸞の人生観』教行信証真仏弟子章

金子大榮　法蔵館　１９６６年初版

二六　真実と方便

〈本文〉
仮といふは、すなはちこれ聖道の諸機、浄土の定散の機なり。
かるがゆへに、光明師のいはく、仏教多門にして八万四なり。まさしく衆生の機の不同なるがためなり。
またいはく、方便の仮門、ひとしくして殊なし、と。
またいはく、門々不同なるを漸教となづく、万劫苦行して無生を証す、と。已上

〈口語訳〉
仮というは、聖道の諸機と、浄土を願う定・散の機である。
それで善導は、
さとりの門は　数多し　八万四千と　説きたもう
根機ことなる　人々を　導びき入れん　ためにとて
また
仮の方便（みちびき）　異るも　大悲のこころに　かわりなし
また
よろづの法は　長き時　つとめはげみて　さとるなり
と説かれた。

一

真仏弟子章は「真の言は偽に対し仮に対するなり。弟子といふは釈迦諸仏の弟子なり」という言葉から説きはじめられた。その語意を思うに仏弟子というもののなかにも「真」なるものだけではなく、「偽」なるものあり、「仮」なるものがあるということであろう。そこで、その「仮の仏弟子」として聖道の行者と、浄土を願いながら定散心をはなれておらないものを、ここに挙げられたのである。しかして、それは当時の教界に対する批判と警告ではあるが、また親鸞自身の回顧と反省とであったと思われるのである。

聖道とは今日「禅」に代表せられているものである。それは親鸞にとりては「自力聖道の菩提心、こころもことばもおよばれず」と感ぜられるものであった。しかるに、その聖道自力が現に仏法として尊ばれているのである。これはおそらく「禅」でなければ知識を頼むこころを破るものはないからであろう。知識人にとりては、知識を超えたる立場というものが、とくに心ひかれるものであるからである。されど超知識の境地といってもそれは菩提心による智慧によりてさとられるものでなくてはならない。それでなければ、いかに論理づけても、野狐禅に過ぎぬものではないであろうか。しかれば、聖道というものは、畢竟これ自力の限界をおもいしらせめて、アミダの智願に帰入せしめる方便となるものにほかならぬのであろう。したがって、その方便に止るものは、「仮の仏弟子」と呼ばるべきものである。

しかれば『歎異抄』にいう「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり」ということも、このこころにて領解すべきであろう。「ものをあはれみ、かなしみ、は

ぐくむ」聖道の慈悲は「おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし」という限界において「小慈小悲もなき身」と思い知られ「念仏もうすのみぞ、すゑとをりたる大慈悲心」となるのである。

二

「浄土の定散の機」とは『観経』に説かれている往生人である。この経には定善と散善ということが説かれている。その定善とは「慮を息め、心を凝らし」て浄土とアミダ仏とを想観することである。それは念仏して浄土を願うものの当然の心がけであるともいえるのであろう。何故ならば、この定善の修行において、浄土とアミダ仏の実在が確かめられるからである。浄土を願うから浄土を想観し、その想観が成就して浄土を願うこころが決定するのである。またアミダ仏を念ずるから、その身心を想観し、その想観の成就において念仏三昧となるのである。こうして定善観とは、そうありたいという根機に応じて説かれたものである。

しかるに、その定善は成就しがたい。なぜならば「慮を息め、心を凝ら」さなければならぬからである。それはつねにこころ乱れている凡夫にできることではない。とくにその定善の方式は経説に順わねばならないものである。もしすこしでも経説にちがうことあれば、それは邪観であって正観ではない。しかれば夢に浄土を見たとか、まぼろしに仏を拝んだとかいうような経験はなんのたのみにならないものであろう。したがって経に定善を説かれたのは、往生人の要求に応じたる方便でありて、真実ではないといわねばならない。その要求を無下に拒否せずに順応しつつ、おのずからその成就しがたいことをおもいしらせめられる。それが方便の慈悲である。

しかし方便とは、ただ往生人の要求に応じるだけのものではない。かえってそれによりて真実の願心を感知せしめられるのである。ここには衆生（われら）のこころに順いながら、如来の願いをとげられるという経意があるのである。その経意を感知せる親鸞には、定善の「観」とは本願のこころをおもいうかべることと領解せられた。耳で聞くべき本願の真実が眼で見るように説かれたのである。

それは散善においても同様である。散とは平常心である。静止（定）していないこころである。散善とは、その平常心によりて行われる善である。その散善として『観経』に説かれているものは、つねに大乗の経典を読み、世の執着を離れるように心がけることである。それのできないものは、せめて人倫の道徳だけでも守らねばならない。それは浄土を願うものの当然の心がけである。されどそれらの修善によりて、かならず浄土へ往生ができると安心することができるであろうか。おそらくそれは何人にとりても不可能なことであろう。それは真実に心からなる「悪を廃し善を修する」ことは難いからである。われらの善心には汚染が雑っている。だから悪を作すまいと心がければいよいよ悪のはなれ難いことが感ぜられ、善を為そうとすれば、それはいつも見せかけだけのものと反省せられる。したがって散善を心がけるものも、浄土を願うかぎり、念仏するのほKないのであろう。こうなれば散善といっても、念仏よりほかに往生の道はないとおもいしらしめる機縁となるものといわねばならない。その自覚に導くための方便に散善は説かれたのであった。そこに思いいたらないものは仮の仏弟子である。

三

これで「仮」の意味は明らかとなった。それは第一に「真」へと導くものである。しかしてその「仮」といわれるものは、真宗を外にしての全仏教である。その全仏教は「八万四千の法門」といわれている。それは要するに「無量の法」ということであろう。あたかも名医は病に応じて薬を与えられるように、釈迦は煩悩の病に応じて法薬を与えられた。それが経典となって伝えられているのである。

その法門のいかなるものであるかは、今日、編集されている「仏教聖典」の目次を見ても、大方は知られるであろう。人間生活における、それぞれの場合の心がけ、日々の教訓、さまざまの修養等は余すところなく説かれている。その教法に順っていけば、われらは幸福と安楽とを得るに違いない。それは疑うべからざるものである。

されど忘れてはならぬことは、それはそれぞれの根機に応じての方便であるということである。ある病を治す薬は、その他の病を治すことができないということもあろう。その適薬を知らなければ名医とはいわれない。仏法もその対手の根機を知らなければ、利益のないものとなるのである。それで衆生の貪・瞋・痴に応じてそれぞれの対治の法も説かれている。したがって真に「機に応じて法を説く」ということは、ただ仏陀のみにできることであるといわねばならぬのであろう。

それは仏陀のさとりは機にかかわりのないものであるからである。「人を見て法を説く」ということは方便であって、真実ではない。真実の法は人を対手にせずに説かれるものでなくてはならぬのである。仏陀はその自内証の『華厳経』を説かれた時には舎利弗・目連という智慧者も如聾如唖であったということである。されどこれは方便を無意味とするものではない。かえって、この真実に達せるものでなくては、方便をもちいることができぬのである。方便とは真実へと帰入せしめるものであるからである。ここには教家に対しての課題があると見てもよいであろう。教家は法を説くに人を見てはならない。大衆の要求に応ずることは、迎合することではないからである。されど人を見ないで法を説いてはならない。教化とは大衆と共に教法に化益されることであるからである。

四

ここに思い知られることは、第二に方便とは「大悲のこころ」を表わすものであるということである。したがって八万四千の法門といっても「大悲のこころ」を現わすものであることにおいては別はない。ただ一つである。しかれば如来の智慧というも、その「大悲のこころ」を感ずるところにある一如の光に他ならぬのであろう。しかるにその「大悲のこころ」を感知するものは念仏の信心である。したがって八万四千の法門というも、念仏のこころに摂めとられては、そのゆたかなる内容となるであろう。これすなわち「この行には、もろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具す。極速円満す。真如一実の功徳宝海なり」ということである。

ここにはその行は単純にして、その徳は無量である念仏の有難さがある。方便の教法といっても、真実に帰入すれば、そのまま真実の内容となるのである。したがって念仏者は、いかなる教法をも聞き得る耳を持つこととなるのであろう。その取捨は念仏の耳が行うのであって、凡智の分別によるのではない。すべての教法に「大悲のこころ」を知る、それが「仏教の真宗」であるからである。

五

されどそれは方便と真実との別はないということではない。かえって方便に止まっていてはならぬということである。ここに方便の第三の意味がある。それは説くものは「門々不同なるを漸教となづく、万劫苦行して無生を証す」ということである。ここでは聖道の教をすべて漸教というこころであろう。たとえ頓悟を説く禅といえども、修行せないものは見魔といわねばならない。しかし修行することになればその終局というものはないであろう。その間にはいかなる雑縁あって退転せぬとも限らない。その退転を「怯劣」と警しめて精進するものは聖道の高僧であり、その「愚鈍」を自覚して念仏するものは浄土の祖師であった。されどその根柢には人間観の相違をいうものがあるのではないであろうか。

念仏成仏これ真宗
　万行諸善これ仮門
権実真仮をわかずして
　自然の浄土をえぞしらぬ
聖道権化の方便に
　衆生ひさしくとどまりて
諸有の流転の身とぞなる
　悲願の一乗帰命せよ

「悲願の一乗」に帰せなければ「自然の浄土」を感知することができない。聖道を求めつつ「諸有に流転の身」となる、底しれぬ悲しみである。

浄土真宗のビハーラを考える

「死ぬ苦しみからの解放と人間の成長 -スピリチュアルケア-」

「仏教文化研究所主催シンポジウム」より

シンポジスト
前埼玉医科大学教授　渡辺　孝子
飛騨千光寺住職　大下　大圓
龍谷大学教授　鍋島　直樹
武蔵野大学教授　種村　健二朗

●鍋島直樹氏(龍谷大学法学部教授)
「自己喪失の中で愛はあふれる　スピリチュアリティと親鸞の生死観」

鍋島　今、お二人の先生方からとても心に届くお話をいただきました。今日会うのが初めてのような方々ですけど、不思議にも心の中で響きあっている内容があります。今日私がお話したいのは、人は死に直面すると自分が自分でなくなっていくわけですけれど、しかし死の前で、より大切なものに気づき深い愛情にあふれているという話ができればと思っております。

まず、スピリチュアリティとはどういうことなのでしょうか。これについては大下先生が今、とてもわかりやすくお話してくださいました。私も少し整理してみたいと思います。普通皆さんスピリチュアリティという言葉を聞くと占いとか、まじないとか、人間の背後に霊魂がいてその霊魂が私を揺り動かしているという、そういう、超自然的な存在を感じる力のようなイメージが強くないでしょうか。通俗的にはスピリチュアリティというのは、占い、運命で使われるような場合が多いです。しかしこの西洋から入ってきた酢ピリチュアリティの本質的な理解は、「生きる意味」とか、「生きる目的を求める心」だと言われています。東京大学の島薗進先生は、科学の認識や近代合理主義が進んできたけれど、自分が使い捨てのもののように死んでいくそういうふうな時代の中で、もう一度、新しい自分の生きる意味を求めようとする、そういうものが、スピリチュアリティに込められていると言われています。そういう意味ではスピリチュアリティというのは、現代の日本人にとって新しいパラダイムを求める大事な言葉だと島薗先生は言われています。

また、宗教とスピリチュアリティはどう違うでしょうか。これについても、人それぞれの解釈があると思います。これは私の友人でオレゴン大学のマーク・ウンノという先生と研究した成果です。レリジョン(religion)とかレリジャスネス(religiousness)というのは、伝統的な宗教儀礼や、神話を有し、あるいは聖なる象徴をもっています。キリスト教には十字架、イスラム教にはモスク。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、道教、仏教、それぞれに教会や寺院の形があり、各宗派によって色とか形のイメージがあります。高野山にも、皆さんの想像される色があるでしょうし、あるいは、空海も思い浮かびます。浄土真宗はどうでしょうか。私のつとめる龍谷大学は紫がイメージカ

ラーですけれど、そういうふうに、何かしら色とか、教団とか、制度とか儀礼というものが、宗教という言葉に結びつきます。

それに対してスピリチュアリティというのは、霊性とか、先ほど大下先生がおっしゃったように、精神性、宗教生といった言葉により、表現されるものです。これは、制度とか教団とかそういう団体の中に見られるものではなくて、皆さん一人ひとりの心の底にある聖なるものです。その聖なるものとは、先生からもらった言葉であったり、誰かと出会ったときに心を動かされた教えであったり、また桜であったり、あるいは1枚の写真であったりするでしょう。一人ひとりの心の底にある聖なるものを、今、スピリチュアリティと呼んでいます。

さて、この霊性に関連して昭和19年、ちょうど戦争が終わる頃に、鈴木大拙が『日本的霊性』という本を書いています。彼が執筆した意図は、当時の国家神道で揺れ動く日本の中で、真の宗教経験はむしろ鎌倉時代の禅・浄土系の思想であり、仏教であることを明らかにしようとした本です。失われてしまった仏教の精神性を『日本的霊性』の中で書き表した本です。鈴木先生によると、「とにかく霊性はいっぺん何とかして大波に揺られないと自覚の念はないのである。」と言われています。戦争とか、阪神淡路大震災、あるいは死別や病気など、自分が大切にしてきたものを根柢から揺さぶられるような経験をしたときに、霊性、スピリチュアリティは自覚されるものだと鈴木先生はおっしゃっています。さらに鈴木先生は、「霊性の奥の院は実に大地の座である。天は恐れるべきであるが、大地は親しむべく愛すべきである。大地はいくら踏んでたたいても怒らない。生まれるものも大地でえあれば、死ねばもとよりそこへ帰る。大地はどうしても母である。母なる大地である。」というような象徴的な言葉で説明しています。スピリチュアリティというものを身体で考えてみましょう。人間の心に知性、情性、霊性という三つのはたらきがあるとすると、知性はどちらかといえば頭脳を使って色々と考える、知的な心です。情性というのは、涙を流したり相手の気持ちを共感して受け止める心でしょう。それに対してこの霊性というのは、皆さんが今座っている椅子、あるいは皆さんを支えている腰、足のように心の深いところで、自分の拠り所となっているようなものを、彼は霊性と表現としたのでしょう。

さて、そういう日本的霊性を表すものをと思い持ってきたものがあります。（映写）この絵は国宝の山越阿弥陀図と言われます。京都の永観堂禅林寺に収められている絵です。縦138センチ、横118センチの大きさで、平安時代の頃に画かれたものです。皆さんはこの絵を何に使うかご存知でしょうか。①赤ちゃんが産まれるときに、安産であることを願って画かれた。②自分の大きな罪を消してもらうためにこの絵の前で祈った。③病人の人を看病するためにこの絵が描かれた。さて、どれでしょう。実は、正解は③番なのですね。これは、亡くなっていく人の枕元に置いた、お仏壇にあたります。皆さんは山が好きですか、海が好きですか。実は病人にとって、自分を回想するということがとても大切なのです。山というのは自分の小さい頃からの思い出を映す場所でしょう。同時にこのアミダ仏の後ろの方を見ると、海がずっと広がっています。手は説法印です。右側の観音菩薩は蓮の台を持って、どうぞこの上に乗って極楽に行きましょうと迎えています。左側の勢至菩薩は合掌しています。そして、足元には二人の童子が旗を持ってこっちだよと呼びかけています。さらにその両脇には四天王がしっかりと見守っているわけです。この絵には実は秘密があって、白毫のところに裏打ちされた跡があって、ここに水晶がはめ込まれていたとされています。私が文化庁や東京国立博物館に「この国宝を当時風に再現したい」とお願いをしたところ、一点だけそれと同じサイズで複製を作って当時風に再現してもよいという許可をいただき作ったものです。こ

の阿弥陀仏の両手のところには五色の糸が残っていて、そこに五色の糸を繋いで、病人が握ることで、病人は決して自分は一人ぼっちではないと実感したのです。人生を回想し、病人と看取るものが語り合ってそれを過去帳に記録したということがわかっています。このように平安時代、私たちの先輩たちは亡くなるときに、この仏壇のそばで、山や川そして海が見える中で自分の人生をふり返ったわけです。いわばふるさとの中で、自分の人生を肯定的に見つめなおしたと言ってもいいかもしれません。

さてスピリチュアルということについて、WHOでは、「『スピリチュアル』は宗教と同じ意味ではない。スピリチュアルな因子は、身体的、心理的、社会的因子を包括した人間の生の全体像を構成する一因として見ることができ、生きている意味や目的についての関心や、懸念とかに関わっていることが多い。特に人生の終末に近づいたりする人にとっては、自ら許すこと、他の人々との和解、価値の確認などが関連していることが多い。」と定義しています。このように、スピリチュアリティとは何かについて整理してみると、霊性、精神性、生きる意味を求め、自分の生きる目的を発見することです。それは、かけがえのないあなたの価値の確認、自らを許し他の人々との和解をすること、同時に自分の人生、大波に揺られたときにしっかりとした拠り所、聖なるものです。

これも不思議にも大下先生と同じ見方でしたが、仏教のスピリチュアリティ、拠り所というのは、「自灯明・法灯明」に表されていると思います。人生の危機における拠り所は、世界でたったひとりのあなた自身であり、あなた自身を明かりとして生きよ、これが「自灯明」の意味です。アメリカで私が生活したときに布団と枕を買いに行ったら、ある布団と枕に〝make of yourself a light〟と書いてありました。どうしてこれが売れるのですかとお店の人に聞いたら、アメリカ人はほとんど移民で、元々住んだふるさとを離れてやってきている、だから自分とは何かわからなくなるときがあるそうです。あなた自身を明かりとして大切にしないさいということが枕に書いてあるとぐっすりと休めるそうです。法灯明というのは、自分を照らす鏡、ダルマ(dharma)という、真理の鏡を同時に持って生きていくべきであると教えたものです。このダルマ(dharma)というのは縁起の自覚です。人は一人で生きているのではない、他の誰かに生かされている。すべての大いなる繋がりの中に私は今あるということです。この二つの明かりの中で生きていくのが仏教徒の生き方であります。私と仏、私とお念仏、私とお仏壇。そういう二つの明かりに照らされて生きていくのです。

浄土真宗の親鸞聖人におけるスピリチュアリティも、「涅槃の真因はただ信心をもってす」とか、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と、いろんな言葉で表現されています。この信じ方について、大谷光真氏がはっとすることを教えてくれました。浄土真宗の信じ方、信心というのは、「朝日が昇るような信じ方ではない。ふと気が付いてみたら、大地に支えられているような安心感。あるいは、赤ちゃんが、自分では気づかなくても、お母さんにだっこしてもらっている安心感。これが浄土真宗の信心(しんじん)、安心(あんじん)である」と。信心とは、何があろうと、いつも大地に支えられているような安心感であり、母に抱かれている安堵感であるということです。そして、支えられているからこそ単に安心して終わるのではなく、大地に支えられている私が力強く立ち上がっていかなくてはいけない。互いに支えあい、助けあう生き方を信心が生みだすということです。また「畢竟依」という表現で阿弥陀仏を表しています。究極的な拠り所ということです。それは浄土、たとえ死してもまた会える世界があるというところに示されています。さらに、「後生の一大事」という言葉も古くから浄土真宗で大事にしてきた言葉でしょう。

(次号につづく)

築地本願寺　宗祖親鸞聖人　報恩講　ご案内

築地本願寺では、毎年、11 月 11 日お逮夜から 16 日ご満座まで、親鸞聖人の報恩講法要がおつとまりになります。ご都合のよろしい時間帯にお参りください。（10：00日中法要　14：00逮夜法要）

15 日（日）大逮夜法要に参拝しませんか。 ご一緒にご参拝をご希望の方は、稱讃寺に

11 月 9 日（月）までにご連絡ください。

15 日の参拝予定　参拝懇志　お一人　3千円（お斎弁当込み）
　11：30　本堂正面階段下に集合
　12：00　お斎弁当　　13：30　堂内布教 14：00　大逮夜法要　御俗姓拝読　御親教

我が歳きわまりて、安養浄土に還帰すというとも、和歌の浦曲の片男波の、寄せかけ寄せかけ帰らんに同じ。一人居て喜ばは二人と思うべし、二人居て喜ばは三人と思うべし、その一人は親鸞なり。我なくも法は尽きまじ和歌の浦　あをくさ人のあらんかぎりは。　　弘長二歳十一月　愚禿親鸞満九十歳

この御文は、表紙の「報恩講の歌」の元となった『御臨末の御書』として伝わっている歌です。学術的・歴史的には親鸞聖人ご自身の直筆の書ではなく、後世に伝えられた遺訓・創作であるとされていますが、親鸞聖人が亡くなった後も、念仏を喜ぶ人々の傍らに親鸞聖人が常に寄り添い、決して独りではないという温かい励ましのメッセージとして、長く親しまれています。（AIさんより）

「波」という現象は、親鸞聖人が亡くなった後の動き（はたらき）を完璧に表現しています。
・「還相回向（げんそうえこう）」の表現・・・浄土真宗では、亡くなった人は極楽浄土へ逝ききっぱなしではなく、すぐにこの迷いの現世に戻ってきて人々を救う活動をすると教えます。これを還相と言います。「一度浄土へ往く（引く波）けれど、すぐにまたあなたを救うために戻ってくる（寄せる波）」という無限の往復運動を、海の波に例えているのです。
・「絶え間なく、いつでも、どこでも」・・・波は一度きりで終わりません。昼も夜も、何百年経っても、絶え間なく打ち寄せます。「私が亡くなっても、波のようにいつでも、何度でもあなたのそばに戻ってくるから、寂しがることはない。私は常にあなたと共にいる」という、残された弟子たちへの究極のラブレター（励まし）なのです。
・波は不変の個（実体）を表しておりません。仏教は無我・諸行無常を説きます。「親鸞という不変の魂（個）が形を変えて戻ってくる」のではなく、**「阿弥陀如来の救いのはたらき（業・本願力）」**が、往生浄土した親鸞を通して絶え間なく人々に届き続けることを波に例えています。
・波（個としての親鸞）は、風という縁によって一時的に海面に現われた「形」に過ぎません。90歳で亡くなったとき、その形（波）は崩れて消えました。
・しかし、水そのもの（本願のはたらき・業）が消えたわけではありません。水は再び新しい波となって現われます。
・つまり、**「親鸞」という個人の肉体や人格がそのまま帰ってくるのではなく、親鸞聖人を動かしていた「南無阿弥陀仏」というお念仏のはたらき（業）が、今度は残された門徒の口から、また次の世代の口から、絶え間なく波のように現われ続けるということです。**（AIさんより）